

チェコ季語の模索

—初夏を詠む—

松井貴子

はじめに

南チェコのヴォドニャニに、チェコ在住の日本人尾形祐美氏が主宰する月見草俳句会がある。主宰者以外の会員は、地元のチェコ人で、近郊を吟行し、お気に入りのカフェで句会を行っている。

外国で俳句を作る場合、日本で俳句を作るときに重視される有季定型のルールを、どのように適用するかが課題になる。言語が異なるので、定型は、文字数でも、音節数でも、同じ数にすることには意味がない。外国語の場合、日本語よりも多くの内容を含んでしまうので、俳句であることの特徴が損なわれてしまう。五七五の形については、三行に書くことで、表現されており、月見草句会でも、この形式を採用している。

季節感を表す季語は、気候風土が異なる地で、日本でのように使うことは難しく、日本の俳人であっても、使える季語が、かなり限られる。季語の本意（歴史的に蓄積されてきた含意）を理解して使うためには、日本人であっても、相応の学習が必要であるので、日本を訪れたことのないチェコ人が、日本の季語を使いこなすのは容易ではない。

月見草句会は、師系としては、ホトトギスにつながり、句会では、兼題として、季語の一つが使われているが、主宰の尾形氏も、チェコで、季語を本来の意味の兼題として使うのは、非常に難しいことであると感じている。しかし、季節感は俳句の重要な要素であり、季語は作品世界を深く、広くする機能を持っている。日本の季語が持つ季節感を表象する機能をチェコの俳句に応用することを模索している。

I チェコの季語

チェコで季節を感じる語を、チェコの月見草句会で、毎月俳句を作っている会員から、主宰の尾形氏が実験的に集めたのが、次の語である。

1 夏の季語

LÉTO／夏

《Čas 時候》

dlouhý večer 長い夕べ

《Nebe (à la počasí) 天候》

horký vzduch 暑い空気

létavice 流星

《Země (à la zeměpis) 地理》

tekutý asphalt 溶けるアスファルト

hladina rybníka 池の水面

《Život 生活》

plavky 水着

parník 蒸気船

stan テント

vodník 河童

vodácká řeka ボート遊びをする人のいる川

tabor キャンプ

dovolená 休暇

dožínky 収穫祭

grilování バーベキュー

marmeláda ジャム

šťáva 果実ジュース、レモネード

sekačka 草刈機

ovocný sirup 果物シロップ

《Sváteční dny 行事》

letní slunovrat 夏至祭

svatební den 結婚式（夏に多い）

věrozvěsti 7月5日

キュリロスとメトディオスがチェコにキリスト教を布教した日の記念日として、国民の祝日となっている。

《Zvířata 動物》

holub 鳩

srna ノロジカ

cvrček 蟋蟀

komár 蚊

moucha 蠅

netopýr 蝙蝠

vosa 虻

slimák 蛞蝓

vážka 蜻蛉

ještěrka 蜥蜴

《Rostliny 植物》

lípa / lipový květ 菩提樹／菩提樹の花

třešně / sladké třešně さくらんぼ／熟れたさくらんぼ

rákosí 葦

bezinky セイヨウニワトコの実

letní jablko 夏の林檎

nesečená louka刈られていない野原

obilí 穀物の畑

kopřiva イラクサ

チェコの月見草句会の会員が夏を感じるものを表す語が、日本の歳時記に倣った分類で配列されている。これらの語は、まだ、暫定的に集められたもので、今後、例句とともに、さらに増補されていく予定である。

チェコで夏を感じさせるものと同時に、チェコでは夏として感じられない日本の季語を弁別していくと、チェコの夏の季語の本意¹が明確になっていくであろう。

2 秋の季語

PODZIM／秋

《Čas 時候》

chladný / chladnější večer 冷える／より冷えてきた夕べ
《Nebe (à la počasí) 天候》

mlha / ranní mlha 霧／朝の霧

chladnější stín より冷たい影

《Země (à la zeměpis) 地理》

該当語なし

《Život 生活》

mošt / moštování (主に林檎の) 果汁／果汁絞り

sklizeň 収穫

šlapání zeli キャベツ踏み (ザワークラウト作り)

první školní den 初登校日／新学期

fotka/y z prázdnin 休暇の写真

štrůdl 林檎パイ

med / stáčení medu 蜂蜜／蜂蜜絞り

《Sváteční dny 行事》

svatý Václav 聖ヴァーツラフの日 (9月28日)

チェコの民族主義的英雄であるヴァーツラフ1世の命日。現在でもチェコの守護聖人として祀られている。

《Zvířata 動物》

pavučina 蜘蛛の巣

チェコではこの時期に蜘蛛がよくあちこちを飛び交って巣を作っている。

《Rostliny 植物》

houby きのこと

šípky 薔薇の実

jeřabiny セイヨウナナカマド

švestky プルーン

dyne 南瓜

patizon ベボ南瓜

rakytník スナジグミ

plod 実

kukuřice 玉蜀黍

trnky 棘

kaštan 栗

ořech 胡桃

秋の季語についても、夏の季語と同様に、集め始められているが、「地理」に分類される語が、まだ見つかっていない。

「地理」の季語は、例えば、『新歳時記(秋)』に収録されているもの²を見ると、秋ならば、まず、「秋の山」「秋の野」「秋の水」「秋の川」が列挙されている。これらの季語は、特定のものを指すのではなく、一句のなかに取り合わされるものによって、様々に表情を変えするという特徴がある。茫漠とした感じがして、季語らしく思えず、使いづらい季語になってしまうかもしれない。「秋の海」「秋の潮」「初潮」は、内陸国のチェコでは、親しみの持てない季語であろう。まして、「不知火」は、日本の九州にある有明海に関わる季語である。「秋出水」は、台風などによって水害が起こることである。「秋」が付けられているのは、梅雨の豪雨などで起こる水害を表す「出水」という夏の季語の存在が前提となっているからである。日本と気候が異なるチェコで、この季語を理解することは難しい。「秋の田」「刈田」「穡田」「落水」という稲作に関わる季語は、米を主食としないチェコでは、実感のない季語となる。日本の秋の地理の季語は、チェコでは理解しにくい、使いづらいものが多い。チェコで使えそうな季語であろうと思われるのは、「花野」「水澄む」である。

チェコで使いづらい日本の季語についても、検討を加えることで、チェコ季語の本意が、季節ごとに確立していくであろう。

II 初夏を詠む一月見草俳句会2021年5月

月見草句会は、チェコの夏の季語を模索する2年目を迎えた。日本の暦では、5月初めに立夏があり、立秋を迎える8月初めまでが夏である。日本の歳時記の季節区分に倣って、月見草句会では、5月に初夏の句を詠んでいる。チェコ語の原句に、日本語の句³と語釈を併記

して、それぞれの句を評釈し、呼応した創作句を付した。

Dáša Franková

zahrádka restaurace

otevřená

první pocit léta

レストラン庭の席開き夏兆す

ダーシャ・フランコヴァー

(語釈) zahrádka 庭、テラス席

restaurace レストラン

otevřená 開く、オープン

první 最初の

pocit léta (夏の気分) 夏めく、夏兆す

尾形氏によると、ヨーロッパの多くの国では、夏から秋にかけて、レストランで、テラス席や庭にテーブルを出した席が好まれる。2021年はコロナの影響で、テイクアウトのみで閉まっていたレストランが、庭の席ならば可、ということで開き始めた、ということも背景にあるという。

ヨーロッパらしい句材が活かされている句である。テラス席、庭の食卓というだけで、もう寒さや冷たさを感じることはない季節になったことが感じられる。日本の都市部では、自動車を通る道に面している店が多く、オープンエアの席は、よい空気ではない。住宅街の細い道にも車が入り込んでくる。居住者である尾形氏自身が、チェコの田舎と称するヴォドニャニでは、きれいな空気の中で、食事を楽しめそうである。羨ましく感じられる。

コロナ禍になって、宇都宮大学では、屋外のテーブルが使用禁止になった。外だと気が緩んで、黙食が守られず、おしゃべりをしてしまうからという判断であろう。そのような状況で、

マスクをしていない学生がいた。

学食でマスクなくしたと青葉風 貴子

Lucie Novotná

počítám pihy

na tvém nose

pocit léta

君の鼻そばかす数える夏兆す

ルツィエ・ノヴォトナー

(語釈) počítám 数える

pihy そばかす

na ~の上

tvém 君の

nose 鼻

pocit léta 夏めく、夏兆す

夏が来て、日射しが強くなると、日焼けとともに、そばかすが濃くなってくる。色白の肌ならではである。色白の人は、皮膚が赤くなつてから、日焼けの肌色になるが、地黒の人は、すぐに日焼け色になる。日に当たらなければ、日焼けが蓄積していた肌も、日焼けの色が抜ける。夏の日差しは、動物の被毛も日焼けの状態にするという。

白猫が日焼けしてゐる出窓角 貴子

Marcela Linhaltová

i volný čas

je zdánlivý jako

pocit léta

余暇も夏めく気分のよう見かけだけ

マルツェラ・リンハルトヴァー

(語釈) i ~も

volný 自由な、空いている

čas 時間

je ~は

zdánlivý 見かけ上、想定上、

もっともらしい、見掛け倒しの

jako ~のような

pocit léta (夏の気分) 夏めく、夏兆す

チェコ語の原句に使われている語の日本語の意味から、「夏来る自由な時間は気分だけ」という訳句が頭に浮かんできた。「夏来ても…」とした方が、より、作者の気分に近づくことができるかもしれない。この句からは、季節が、自分に断りもなく勝手に、夏に移っても、自分の気持ちはついていかないよ、という作者の思いが感じられた。季節が移るとき、気温は、日々、上がったたり、下がったりを繰り返しながら、変化する。どの季節も、このように変化をしているはずなのに、春にだけ「三寒四温」という季語があり、他の季節に類似の季語はない。これまで、気に留めていなかったことに疑問を感じるようになった。

三寒四温 どうして夏にないのだろう 貴子

Dáša Franková

voní střemcha

a posečená tráva

první pocit léta

芝刈りと上溝桜夏薫る

ダーシャ・フランコヴァー

(語釈) voní 薫る

střemcha 上溝桜

a ~と

posečená 刈られた

tráva 芝生
první 最初の
pocit léta 夏気分、夏めく、夏兆す

気温が上がる夏には、いろいろなものが、それぞれの香を放ち始める。松尾芭蕉の弟子であった凡兆が作った発句「市中は物のにほひや夏の月」が思い出された。芭蕉は、この句に続けて、「あつしあつしと門々の声」という脇句を付けている。江戸時代の京都の町中の夏の匂いと人々の声、現代のヴォドニャニの夏芝を刈る音と芝草の香が、響き合って、読者の嗅覚と聴覚に届く句である。子供の頃、飼っていた兎のために草取りに行ったとき、鎌を使うのが怖くて、鋸で雑草の茎を切っていて、鋸は鋭利ではないので、青草の匂いが強く感じられたことが思い出された。

兎飼ふ鋸で刈る夏草を 貴子

Marcela Linhartová

napůl nazí
s pocitem léta
vyběhly ven

夏めいて半裸で外に駆け出す子

マルツェラ・リンハルトヴァー

(語釈) napůl 半分

nazí 裸
s ~と
pocitem léta 夏めく、夏兆す
vyběhly 走り出す
ven 外へ

夏が来るのを心待ちにしていた子どもの喜びが溢れている。初夏の男の子の定番の行動であろう。

現代では、女性が人目を憚らないで半裸になることは難しくなっているが、季語には、夏の暑さをしのぐものとして、「裸足」「肌脱ぎ」がある。他にも、「端居」「髪洗う」「昼寝」という季語があり、チェコと日本で共有できそうである。駆け出した子の、その後を句に詠んだ。

駆け戻るやがて昼寝の子となれり 貴子

Pavel Janšta

chmýří padá
ze stromů
pocit léta

綿毛降る木々の上から夏兆す

パヴェル・ヤンシュタ

(語釈) chmýří 綿毛

padá 落ちる、降る
ze ~から
stromů 木々
pocit léta 夏めく、夏兆す

眼前にとどまらないで、俯瞰するような大きな視点が提示されていて、動きのある立体的な空間が見えてくる。夏らしい躍動的な時間が流れていて、作品の世界に、自分も存在しているような、作品が作り出している環境に囲まれているような感覚に包まれた。ヴォドニャニでは、たくさんの木々が夏を知らせくれることがわかる。

夏告げる葉擦れの木々が語り来る 貴子

Lenka Ebelová

letní ráno
voní tavolníky

cestou do školy

夏の朝シモツケ薫る通学路

レンカ・エペロヴァー

(語釈) letní 夏の

ráno 朝

voní 薫る

tavolníky シモツケ

cestou 道

do ~へ、まで

školy 学校

学校に通う夏の日々に、毎日繰り返して感知される薫りは、通学路や学校で経験した様々な思い出と結びついて記憶される。後になって、同じ薫りを嗅いだときに、懐かしい思い出が、いくつも、いくつも、瞬時に蘇ってきて、人の嗅覚が持つ力に驚かされる。

風薫る今年の香を確かめて 貴子

hřeju si ruce

možná že léto

čeká za kopcem

手温め夏の兆しは丘の向こう 失名⁴

(語釈) hřeju si 温める

ruce 手

možná たぶん、おそらく、もしかして

že ~ということ

léto 夏

čeká 待つ

za ~の向こう

kopcem 丘

「水温む」の季語があるように、春に水温が

上がって、その後、夏には、皮膚に冷たさを感じることも、もう全くないほどに、空気の温度が上がるということであろうか。まだ厳しくない暑さだからこそその感覚である。自分の肌感覚が発見した夏の始まりが、遠くにも広がっていることを、視覚によって確認しているのであろうと思われた。

冷たさが消えゆく夏が背伸びして 貴子

この句会では、主宰の尾形氏が短歌風の作品とした作品が出されていた。俳句としては長い作品であったが、「夏めく」という兼題に適ったよい内容であったので、短歌はあまり知らないけれども、短歌調で訳してみたという。

Mariana Kadlčíková

květnové ráno

prchavý pocit léta

když s tebou snídám

花盛り夏めく気持ちはかなくて

あなたとふたりとる朝食や

マリアナ・カドルチャーコヴァー

(語釈) květnové 花の、花盛りの

ráno 朝

prchavý はかない、変わりやすい

pocit léta 夏めく、夏兆す

když ~のとき

s ~と一緒に

tebou 君

snídám 朝食をとる

花々が咲き乱れる美しい朝である。春の花から夏の花に変わっていることに気づいて、新しい季節の到来を感じながら、大切な人との朝食を楽しんでいる。とても素敵な時間であると感

じられた。しかし、そこに、はかなさや、変わりやすさを感じるのは、新しさや、変化ということに対する、いくばくかの警戒感、不安からくるものであろうか。日本では、5月が初夏で気温が上がるが、6月の梅雨で抑えられ、7月に梅雨が明けて、盛夏になる。梅雨は快い夏ではないので、はかないと惜しむ感覚は持てなさそうである。

雨の似合う紫陽花の名に七変化 貴子

おわりに

句会で俳句を詠むときには、兼題（席題）と当季雑詠がある。日本では、伝統的に兼題を採用している結社、当季雑詠の結社、会員の鍛錬の場としての課題句欄に題を設定する結社など、様々である。

初心者が兼題で作ることは、先人の句を学ぶ意味はあるが、真似から入ることになり、個性の発揮を制限する。その意味で、チェコの句会での兼題はハードルが高い部分もあるのではないかと推測された。日本の季節感を学ぶことよりも、チェコでの季節感を活性化することを優先して、実感を伴った季節認識の具体例を蓄積することで、俳句を作ることがもっと楽しくなるだろうとも思われた。

主宰の尾形氏も、季語本意ではなく、作者本位の俳句の方が、現代の私たちには面白いものを感じられると思うと述べていたが、当初の私の推測とは少し違っていた。

チェコの句会では、季語を「お題」として、チェコ人の作者本位の俳句を作っている。そのような創作活動を支えているのは、日本の季語を、本意と例句によって、チェコ人の会員に紹介し、それを、俳句の「お題」として試しに使えるようにすることで、ルールで縛るだけではない、俳句の感覚筋肉を培えるのではないかと、という、尾形氏の考えである。月見草句会

では、「題詠」と同時に「雑詠」でも創作を続けている。会員は、自分の好きな詠み方を選択できる。兼題で作りたいと思えなければ、雑詠で作ればよい。雑詠によって、チェコの季節を発掘し、チェコの季語を提案することもできる。

尾形氏は、月見草句会での創作方法を、「希望者は日本の季語に挑戦、希望者は季節を発見、やらない人は自分の句を読む、それら全部が共存する。」と述べ、チェコ人にはそういうやり方が合っていると確信している。

日本の俳句と、どのように向き合い、関係を作るか、自分で選択する。そして、他者の、自分とは異なる選択も尊重する。そのようなチェコ俳句のやり方は、日本の俳句の国際化として、新たな面を生み出すであろう。

本論文は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）女性教員海外派遣制度」（2020年10月～2021年3月）による研究成果である。

参考文献

- 角川文化振興財団編 ふるさと大歳時記別巻
(1995) 『世界大歳時記』角川書店。
- 加藤楸邨・大谷徳藏・井本農一監修、尾形仍・草間時彦・島津忠夫・大岡信・森川昭編
(1995) 『俳文学大辞典』角川書店。
- 平井照敏編 (1989、1996改訂版) 『新歳時記 (春)』河出書房新社。
- 平井照敏編 (1989、1996改訂版) 『新歳時記 (夏)』河出書房新社。
- 平井照敏編 (1989、1996改訂版) 『新歳時記 (秋)』河出書房新社。
- 平井照敏編 (1989、1996改訂版) 『新歳時記 (冬)』河出書房新社。
- 平井照敏編 (1990、1996改訂版) 『新歳時記

(新年)』河出書房新社。

角川書店編 (1973、1977 7版) 『図説 俳句大
歳時記 春』角川書店。

角川書店編 (1973、1977 7版) 『図説 俳句大
歳時記 夏』角川書店。

角川書店編 (1973、1978 6版) 『図説 俳句大

歳時記 秋』角川書店。

角川書店編 (1973、1977 6版) 『図説 俳句大
歳時記 冬』角川書店。

角川書店編 (1973、1978 5版) 『図説 俳句大
歳時記 新年』角川書店。

1 月見草句会主宰の尾形氏が、季節の分類に悩む季語が、「BABÍ LÉTO／インディアン・サマー」である。「夏」という語がつかわれているが、実際の季節感としては、夏と秋の中間、チェコの9月頃の季節感で、本格的な秋になる前の一ヶ月ほどの間のことを指す語であるという。チェコ人にとっては秋とも言えず夏とも言えない、特別な感じ、ということで、春夏秋冬の四季とは分けて、独立した分類を考えているということであった。

2 「地理」『新歳時記(秋)』71-80頁

3 チェコ語俳句の日本語訳は、月見草句会主宰尾形祐美氏による。

4 句会では、作者名がわからなくなってしまうことが、よく起こる。そのときは、作者名は空欄にせず、「失名」と記す。